

多賀城市文化財調査報告書 第14集

年報 1

昭和 61 年度

昭和 62 年 3 月

多賀城市教育委員会

多賀城市文化財調査報告書 第14集

年 報 1

昭和 61 年度

序

多賀城市では、昭和62年4月に文化センターが開館いたします。文化活動の拠点として久しく市民の皆様が待ち望んでおられたものですが、さらに喜ぶべきことに同センターには東北地方で初めてという市立の埋蔵文化財調査センターも組織の一つとして設置されることになっております。これは市内の遺跡の調査や研究を専門的に行なっていく機関であり、“史跡のまち多賀城”にふさわしい施設と言えましょう。同センターは収蔵品展示室も備えており、発掘調査で出土したものを展示して広く皆様に公開する考えであります。このような場を通して、文化財に対する皆様のご理解が深まっていくことを切に願うものであります。

さて、このような恵まれた環境が次第に整っていく中で、今年度から『年報』を刊行することになりました。多賀城市教育委員会が発掘調査を実施するようになって今年で8年になりますが、その間、貴重な成果を挙げながらも諸般の事情から報告書が刊行されないで今日に至っているものがあります。そこで本書では、昭和54年度からの発掘調査の概要を一覧表にまとめ、さらに今年度実施した発掘調査6件の内4件の概要を収録しております。他の2遺跡につきましても、年度内に報告書を刊行する予定でありますので併せてご活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、日頃ご指導ご助言をいただいている方々に対し厚く御礼申し上げます。

昭和62年3月

多賀城市教育委員会

教育長 玉蟲謹

例　　言

1. 本書は、多賀城市教育委員会社会教育課文化財保護係が昭和61年度に実施した発掘調査の年度報告である。
2. 「年報」としてはじめて刊行するため、昭和60年度以前の調査内容については、はじめに「I. 発掘調査の経緯」として表にまとめた。
3. 今年度調査したうちで高崎遺跡と市川橋遺跡については年内に報告書を刊行する予定のため本書には収録していない。
4. 留ヶ谷遺跡と新田遺跡の実測基準線は、国家座標の方位をとっている。
5. 土層の色調については、「新版標準土色帖」（小山正忠・竹原秀雄：1976）を使用した。
6. 調査・整理に関する諸記録及び出土遺物は、多賀城市教育委員会が一括保存している。
7. 本書の執筆・編集は高倉・千葉・相沢・柏原が担当した。
8. 本書の作成については、佐藤悦子・柏倉露代・須藤美智子・熊谷純子・黒田啓子の協力を得た。

本 文 目 次

序 文

例 言

I. 発掘調査の経緯.....	2
II. 昭和61年度調査報告.....	6
(1) 橋本団貝塚.....	8
(2) 留ヶ谷遺跡（第2次）.....	11
(3) 柏木遺跡.....	19
(4) 新田遺跡（第5次）.....	23

写 真 図 版

- (1) 橋本団貝塚
- (2) 留ヶ谷遺跡
- (3) 柏木遺跡
- (4) 新田遺跡

I 発掘調査の経緯

多賀城市が単独で発掘調査を開始したのは、昭和54年度に入ってからである。それまでは、公共事業による調査を除くと、民間の宅地造成等に対応する調査はほとんど行なわれていなかった。

しかし、54年度の館前遺跡の調査を皮切りに埋蔵文化財包蔵地に係る開発計画が出始め、発掘調査件数は確実に増加して来ている。55年度以降、開発計画の段階で事前協議が行なわれるようになった理由の一つに、館前遺跡の追加指定が上げられる。館前遺跡の発掘調査は、開発を前提とした事前調査として、宅地造成工事と同時進行で行なわれたが、重要な遺跡であることが判明し、開発は中止され急拠保存されることになったものである。

56年から59年にかけて、本市西部の新田・山王地区で中規模から大規模な開発が発生し、併行して多賀城跡の南面水田地域にも小規模な住宅建設が行なわれるようになった。この中で、57~58年に実施した新田遺跡南寿福寺地区の調査で、大規模な環濠遺構が発見され、これまで全く知られていなかった多賀城周辺の中世を考える重要な遺跡であることが明らかになった。また、山王遺跡東町浦地区からは、幅約12mの古代の道路跡が発見され、多賀城跡周辺地域には国府を支えたまち並みが形成されていたと考えられた。

60年代に入って、開発は小規模化、分散化の傾向を示すが西部地区の開発は根強く、今後も展開される様相を示している。高崎遺跡の東端部に位置する留ヶ谷地区の開発計画は、新たに留ヶ谷遺跡の存在を提起させる結果となった。本市の近世史にとって、これもまた重要な発見である。

これまで実施して来た発掘調査について、年度別に一覧表を作成したので参照願いたい。

年度別発掘調査一覧表

昭和54年度

遺跡名	地 区	調査期間	面 慢	遺構年代	発見遺構	発見遺物
浮島字船前 館前遺跡	浮島字船前	54年4月1日 ~ 11月15日	4,800m ²	平安時代	掘立柱建物跡 掘立柱列跡、溝跡	土師器、須恵器、赤焼き土器、瓦、古銭、砥石
山王遺跡	山王字中山王 (中山王地区)	54年12月17日	1,500m ²	中世	掘立柱建物跡	土師器、須恵器、灰釉陶器、瓦、紡錘車、土鍤、鐵鎌、刀子、石帶
		55年3月22日		奈良・平安時代	小柱穴、溝跡、土塙	カワラケ、古銭、硯、砥石
	山王字山王二区 (山王二区)	54年12月20日 ~ 55年1月28日		平安時代	掘立柱建物跡 堅穴住居跡	土師器、須恵器、瓦
市川橋遺跡	浮島字高平 高崎字水入橋ノ口	54年1月16日 ~ 12月12日	320m ²	平安時代	小柱穴、溝跡、土塙	古銭

昭和55年度

遺跡名	地 区	調査期間	面 慢	遺構年代	発見遺構	発見遺物
山王遺跡	山王字西町浦 (西町浦地区)	55年6月5日 ~ 11月30日	1,000m ²	古墳時代	堅穴住居跡 溝跡、土塙	土師器、須恵器、純圓文土器、鉄製品、石製模造品(円盤形・劍形・白玉)、滑石(原石・未製品)、玉類(ガラス玉・琥珀玉)、砥石
				平安時代	掘立柱建物跡 小柱穴、堅穴住居跡	土師器、須恵器、赤焼き土器、灰釉陶器、綠釉陶器、砥石
				江戸時代	井戸跡、溝跡	陶磁器、木製品(漆器・下駄・田下駄・木札・柄・ヘラ状製品・栓)
高崎遺跡	中央公園 高崎一丁目 (弥勒地区)	55年10月31日 ~ 56年1月31日	350m ²	平安時代	小柱穴、土塙 合口甕棺	土師器、須恵器、赤焼き土器、瓦

昭和56年度

遺跡名	地 区	調査期間	面 慢	遺構年代	発見遺構	発見遺物
高崎遺跡	中央公園 高崎一丁目 (弥勒地区)	56年4月27日 ~ 7月30日	1,500m ²			土師器、須恵器、赤焼き土器、瓦、古銭
市川橋遺跡	市川字伏石 (伏石地区)	56年12月14日 57年1月29日	1,500m ²	平安時代	小柱穴、水田跡、溝跡、 道路状遺構、土塙	土師器、須恵器、赤焼き土器、灰釉陶器、綠釉陶器、瓦、円面鏡、砥石
新田遺跡	新田字後 (後地区)	56年8月4日 ~ 12月5日	1,780m ²	奈良時代	掘立柱建物跡、堅穴住居跡、溝跡、土塙	土師器、須恵器、瓦、鉄鎌、刀子、銀環
				中世	掘立柱建物跡 井戸跡、溝跡、土塙	陶器、古銭

昭和57年度

遺跡名	地 区	調査期間	面 積	遺構年代	発見遺構	発見遺物
新田遺跡	山王字南寿福寺 (南寿福寺地区)	57年7月15日 ~ 12月11日	3,100m ²	古墳時代	特殊遺構 溝跡、土塁	土師器
				平安時代	掘立柱建物跡、竪穴住居跡、溝跡、土塁	土師器、須恵器、赤焼き土器、土鈴、石帶(巡方・丸鉢)、管玉、鏡
				中世	掘立柱建物跡 井戸跡、溝跡、土塁	陶磁器、木製品(漆器・下駄・曲物容器) 砥石、古錢
市川橋遺跡	市川字伏石 (伏石地区)	57年12月17日 ~ 58年2月28日	1,200m ²	平安時代	小柱穴、水田跡、 道路状遺構、竪穴遺 構、溝跡、土塁	土師器、須恵器、赤焼き土器、灰釉陶器、綠 釉陶器、円面鏡、風字硯、土錘、鉄製品
高崎遺跡	高崎字表 (表地区)	57年6月7日 ~ 7月3日	600m ²	奈良・平安時代	小柱穴、埋甕、溝跡	土師器、須恵器

昭和58年度

遺跡名	地 区	調査期間	面 積	遺構年代	発見遺構	発見遺物
新田遺跡	山王字南寿福寺 (南寿福寺地区)	58年4月25日 ~ 10月1日 11月7日 ~ 12月16日	3,700m ²	古墳時代	特殊遺構、溝跡 土塁	土師器
				平安時代	掘立柱建物跡 竪穴住居跡、井戸跡 溝跡、土塁	土師器、須恵器、赤焼き土器、灰釉陶器、瓦 円面鏡、土鈴、石帶、管玉、刀子、鐵鎌
				中世	掘立柱建物跡 井戸跡、溝跡、土塁	陶磁器、カワラケ、木製品(漆器・下駄・曲 物容器・拂・塔婆)、古錢
山王遺跡	山王字東町浦 (東町浦地区)	58年10月3日 ~ 59年3月17日	2,300m ²	古墳時代	溝跡、土塁	土師器、須恵器、木製品(拂・斧の柄)、石製 模造品(円盤形・剣形)、玉類(ガラス玉・管 玉・琥珀玉)
				平安時代	掘立柱建物跡 井戸跡、溝跡、土塁 道路遺構	土師器、須恵器、赤焼き土器、灰釉陶器、瓦
				中世 近世	土塁 土塁	陶器、木製品(板草履) 陶磁器、木製品(曲物・下駄)
市川橋遺跡	浮島字高平 (大臣宮地区)	58年8月17日 ~ 10月24日	460m ²	平安時代	掘立柱建物跡 小柱穴	土師器、須恵器、赤焼き土器、瓦
	高崎字水入 (水入地区)	59年1月9日 ~ 2月20日	500m ²	平安時代	溝跡	土師器、須恵器、赤焼き土器、灰釉陶器、瓦 木製品(木簡・蓋串・祭祀用具・弓・曲物容 器・盤・折敷・錘・椀・下駄)、砥石、鉄製品 (鐵鎌・鐵斧・鉗)
志引遺跡	東田中二丁目	58年5月23日 ~ 6月18日	84m ²	旧石器時代 中世	小柱穴、溝跡	石器、爪形文土器、散落起線文土器

昭和59年度

遺跡名	地区	調査期間	面積	遺構年代	発見遺構	発見遺物
新田遺跡	山王字北寿福寺 (北寿福寺地区)	59年6月11日 ~ 9月30日	1,800m ²	平安時代	堀跡	土器類、須恵器、赤焼土器、灰陶器、綠釉陶器、瓦
				中世	獨立柱建物跡 井戸跡、溝跡、土塁	陶磁器、木製品(漆器、下軒、板草履、曲物容器)、磚、砥石、石皿、銅製品(鏡・六器)、釘
				近世	獨立柱建物跡 堀跡、土塁	陶磁器、古錢
大代横穴古墳群	大代五丁目	59年3月2日 ~ 6月4日	300m ²	古墳時代	横穴古墳	土器類、須恵器、勾玉、切子玉、纺錘車、金銅鋳頭短太刀、鐵製直刀、刀子、耳環
				中 ~ 近世	塚	
				江戸時代		
市川橋遺跡	高崎字高平 (高平地区)	59年10月22日 ~ 60年1月21日	800m ²	平安時代	獨立柱建物跡 掘立柱建物、小柱穴 水田跡、溝跡	土器類、須恵器、赤燒土器、灰陶器、綠釉陶器、瓦、円面鏡、土鏡、土製カマド、木製品(曲物容器、盤・枕)
				江戸時代	水田跡	陶磁器、古錢、金属製品(鉢玉・釘・鉄製鏡・キセル)

昭和60年度

遺跡名	地区	調査期間	面積	遺構年代	発見遺構	発見遺物
留ヶ谷遺跡	留ヶ谷一丁目	60年4月20日 ~ 7月3日	1,300m ²	奈良時代	土塁	土器類、須恵器
				江戸時代	土塁、溝跡、土塁、 段差	陶磁器、砥石、古錢
高崎遺跡	高崎字桜下 (桜下地区)	60年7月19日 ~ 8月10日	600m ²	平安時代	獨立柱建物跡、土塁	土器類、須恵器、瓦
				江戸時代	独立柱列跡、土塁	
高崎字井戸尻 (井戸尻地区)		60年9月19日 ~ 11月16日	800m ²	平安時代	獨立柱建物跡、堅穴住居跡、小柱穴、 柱列跡、溝跡、土塁	土器類、須恵器、赤焼き土器、瓦、土製支脚砥石、円面鏡、鐵製品、木製品
				中世	溝跡	陶磁器
山王遺跡	山王字山王二区 (山王二区)	60年5月27日 ~ 7月5日	400m ²	平安時代	柱列跡、溝跡、井戸跡	土器類、須恵器、赤焼き土器、灰陶器、木製品(曲物容器・盤・壺・箸状製品・串状製品)
				中世	獨立柱建物跡 空掘跡、土塁	陶器、硯、砥石、纺錘車、金属製品、木製品(下駄・靴・漆器・枕・自在鉤)
山王遺跡	山王字千刈田 (千刈田地区)	60年11月25日 ~ 61年2月14日	378m ²	平安時代	獨立柱建物跡 堅穴住居跡、井戸跡、 小柱穴、溝跡、土塁	土器類、須恵器、赤焼き土器、土製カマド、円盤状土製品、瓦、砥石、二面鏡、円面鏡、灰陶器、木製品(曲物容器・折敷・盤)

昭和61年度

遺跡名	地区	調査期間	面積	遺構年代	発見遺構	発見遺物
留ヶ谷遺跡	留ヶ谷一丁目	61年5月12日 ~ 8月18日	1,150m ²	江戸時代	獨立柱建物跡、柱列跡、 土塁、溝跡、 空掘跡、土塁	陶磁器、カワラケ、瓦、砥石、石臼、古錢、木製品(漆器)
				江戸時代	独立柱建物跡、堅穴住居跡、柱列跡、 井戸跡、合口甕棺	土器類、須恵器、赤焼き土器、円面鏡、瓦、古錢、木製品(漆器)
高崎遺跡	高崎字井戸尻 (井戸尻地区)	61年6月12日 ~ 11月4日	2,000m ²	平安時代	獨立柱建物跡、堅穴住居跡、柱列跡、 井戸跡、合口甕棺	土器類、須恵器、赤焼き土器、灰陶器、綠釉陶器、瓦
				江戸時代	独立柱建物跡、塔婆 井戸跡、溝跡、土塁	陶磁器、木製品(漆器・塔婆・桶・曲物容器・木箱・鉢・板草履・枕・栓)、鐵製品(小柄・短刀)、古錢
新田遺跡	山王字北寿福寺 (北寿福寺地区)	61年9月29日 ~ 62年4月9日	2,000m ²	平安時代	獨立柱建物跡 井戸跡、溝跡、土塁	土器類、須恵器、赤焼き土器、灰陶器、綠釉陶器、瓦
				中世	獨立柱建物跡 井戸跡、溝跡、土塁	陶磁器、木製品(漆器・塔婆・桶・曲物容器・木箱・鉢・板草履・枕・栓)、鐵製品(小柄・短刀)、古錢
市川橋遺跡	高崎字水入 (水入地区)	61年10月29日 ~ 12月17日	370m ²	平安時代	土塁、杭列 河川・造構	土器類、須恵器、瓦
				中世	溝跡	陶磁器、木製品(枕・板草履)

次にこれまで行なった発掘調査件数と各遺跡ごとの割合をみると、新田遺跡5件(17.2%)、山王遺跡6件(20.6%)、市川橋遺跡7件(24.1%)、高崎遺跡6件(20.6%)ではほぼ83%が特別史跡周辺部の遺跡群で行なわれている。

この傾向は今後さらに強まるものと予想されることから、これまで行なって来た遺跡名+地区名の記録方法では混乱を生じると考えられるため、各遺跡ごとに調査次数を付けて呼称することにした。54年度以降の各遺跡ごとの調査次数は次のとおりである。

例 (記録方法 SN-NU → SN-3)
 山王遺跡 西町浦地区 山王遺跡 3次調査

遺跡別発掘調査一覧表

新田遺跡

次 数	年 度	地 区	調 査 成 果
第1次	56年度	後地区	周囲に溝をめぐらした掘立柱建物跡や銀環が出土した堅穴住居跡などを発見した。
第2次	57年度	南寿福寺地区	古墳時代前期・奈良・平安時代、中世の遺構を発見し、長期にわたる複合遺跡であることが明らかになった。
第3次	58年度	南寿福寺地区	第2次調査で発見した中世の遺構は、溝を巡らした範囲であることを確認した。
第4次	59年度	北寿福寺地区	平安時代の溝跡や南寿福寺地区で発見したような中世の範囲を発見した。
第5次	61年度	北寿福寺地区	平安時代から江戸時代にかけての遺構を発見した。 中世の遺構は他の地区と同様に範囲と見られる。

山王遺跡

次 数	年 度	地 区	調 査 成 果
第1次	54年度	中山王地区	奈良・平安時代の掘立柱建物跡を発見した。
第2次	54年度	山王二区	奈良・平安時代の掘立柱建物跡、堅穴住居跡を発見した。 古墳時代の特殊遺構から古墳時代中期の土器や石製模造品或泊玉などがまとめて出土している。
第3次	55年度	西町浦地区	多量の石製模造品や原石、未製品などが出土していることから、おそらく石製模造品を製作した場所であったと考えられる。
第4次	58年度	東町浦地区	古墳時代の溝から多量の土器とともに木製品が出土している。 また、多賀城跡外郭南辺と平行する道路跡を発見した。
第5次	60年度	山王二区	溝跡や井戸跡から日常の生活用具である木製品を発見した。
第6次	60年度	千刈田地区	古代の掘立柱建物跡や堅穴住居跡、底に曲物を据えた井戸跡などを発見した。

市川橋遺跡

次 数	年 度	地 区	調 査 成 果
第1次	56年度	状石地区	水田跡、道路状遺構、溝跡など土地の区割を目的とした遺構を確認した。
第2次	57年度	状石地区	前年度発見した水田跡や溝跡と同一方位をもつ畦畔遺構や道路状遺構を発見した。
第3次	58年度	大臣宮地区	ここで発見した掘立柱建物跡は、柱穴の大きさや多賀城に近接する立地条件などから、国司クラスの居館と考えられる。
第4次	58年度	水入地区	溝跡から多量の木製品を出土した。その中には「禁杖八十…」と記された木簡や、斎事・祭祀用具など注目すべきものがある。
第5次	59年度	高平地区	平安時代から江戸時代にわたる水田跡を発見し、水田經營が連続的に営まれたことを確認した。
第6次	61年度	水入地区	古代から中世にかけての溝跡を発見したが他の地区に比べ遺構の分布は希薄であった。

高崎遺跡

次 数	年 度	地 区	調 査 成 果
第1次	55年度	弥勒地区 (中央公園)	県内でも出土例が少ない合口壺棺を発見した。
第2次	56年度	弥勒地区 (中央公園)	丘陵斜面の調査では遺構を発見できなかった。
第3次	57年度	表地区 (市営住宅)	溝跡・土塁・埋甕を発見した。埋甕は壺棺の可能性が高い。
第4次	60年度	坂下地区	古代の掘立柱列を発見した。
第5次	60年度	井戸尻地区	奈良・平安時代の掘立柱建物跡・堅穴住居跡など、多賀城廃寺を取り囲む集落の様子を知る上で貴重な資料を見出した。
第6次	61年度	井戸尻地区	掘立柱建物跡・堅穴住居跡を発見した。 この地区においては、丘陵部から低湿地にかけて集落が広がっていたことが明らかになった。 また本遺跡で2例目の合口壺棺を発見した。

留ヶ谷遺跡

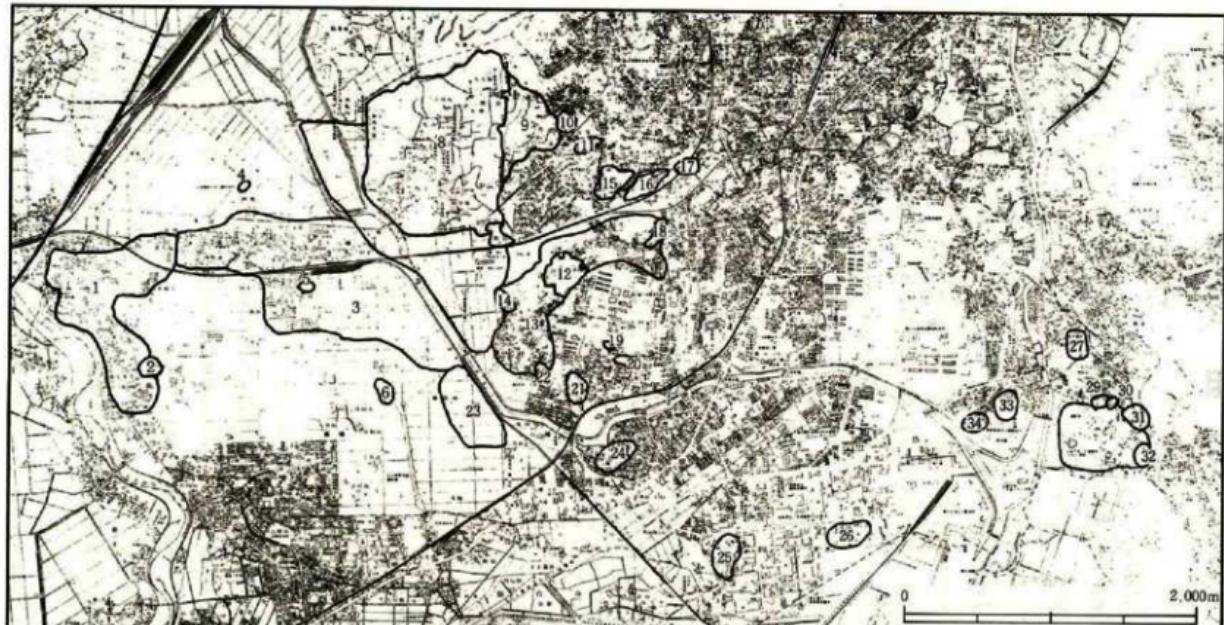
次 数	年 度	地 区	調 査 成 果
第1次	60年度	中通り地区	館跡の一部と考えられる土器・溝跡を発見した。
第2次	61年度	〃	江戸時代前半から現代に至るまでの遺構を発見した。 本調査区は、発見した遺構や遺物から武士階級の屋敷跡と考えられる。

II 昭和61年度調査報告

昭和61年度に調査を実施した遺跡は、表1に示した4遺跡及び高崎遺跡(第6次)、市川橋遺跡(第6次)の6遺跡である。この内、高崎・市川橋遺跡については、年度内に報告書を刊行する予定であるため、他の4遺跡についてその概要を報告する。

遺跡名	所 在 地	調 査 期 間	調査範囲	施 工	担当 職 業	調 査 方
橋本路貯蔵	大代五丁目54—4番	61年4月14日 ～4月24日	173m ²	給油所造成	石川、新沢	式 勘 調査
留ヶ谷遺跡 (第2次)	留ヶ谷一丁目356番外	61年5月12日 ～5月18日	1,150m ²	宅地造成	石本、千葉	
柏木道跡	大代五丁目1—1番	61年5月14日 61年5月25日 ～5月28日	36,500m ² 130m ²	宅地造成	高倉、渡辺、相沢	分 布 調査 試 塵 調査
新田遺跡 (第5次)	山王学苑寿福寺1—1番	61年9月29日 62年3月31日	2,000m ²	宅地造成	石川、石本、千葉	

表1 昭和61年度調査一覧表



道跡番号	道 跡 名	時 代	遺跡番号	道 跡 名	時 代	遺跡番号	道 跡 名	時 代	遺跡番号	道 跡 名	時 代
1	新田道跡	古墳・奈良・中世	10	法性院道路	奈良・平安	19	稻荷殿古墳	古	28	大代道跡	绳文・平安
2	安楽寺道跡	古代・中世	11	高原道路	*	20	桜井古墳跡	中世	29	大代柄穴古墳群	古
3	山王道跡	古墳・奈良・中世	12	御前史跡多賀城寺跡	*	21	志引道路	旧石器・奈良・中世	30	大代圓列古墳	外生文
4	内筋路	中世	13	高崎道路	奈良・平安・中世	22	東田中墳前道路	奈良・平安・中世	31	舊本開貝塚	生文
5	山地田舎路	*	14	丸山圓古墳群	古	23	六真田道路	奈良・平安	32	糸形圓貝塚	生文
6	大日北道跡	奈良・平安	15	小沢原道路	奈良・平安	24	八幡道跡	奈良・平安・中世	33	元舟場道路	平安
7	市川橋遺跡	*	16	野田道路	奈良・平安・中世	25	八種冲道路	奈良・平安	34	西原道路	奈良・平安
8	御前史跡多賀城跡	奈良・平安・中世	17	矢作ヶ崎路	*	26	東原道路	*			
9	西沢道跡	奈良・平安	18	笛ヶ谷道路	奈良・平安	27	柏木道路	*			

(1) 橋本貝塚

I 遺跡の位置と環境

橋本貝塚は、多賀城市の中心部から東へ約3km離れた大代5丁目地内に所在している。即ち、県道多賀城菖蒲田線と七ヶ浜町遠山方面に至る道路との分岐点に位置し、一部は道路を隔てて七ヶ浜町に及んでいる。

地形的には、松島丘陵に属する小丘陵の突端部に位置し、東側は低湿地、西側と南側は砂の厚く堆積した地盤となっている。この小丘陵の南斜面には一部貝層の露出している地点がある。

本遺跡の周辺には各時代の遺跡が多く残されており、特に貝塚には特筆すべきものがある。まず、縄文時代のものとしては、国指定史跡である大木貝塚をはじめ左道貝塚・鬼ノ山貝塚などが台地縁辺に立地している。弥生時代のものでは、樹形圓貝塚・大代洞窟遺跡などが知られている。特に樹形圓貝塚は大正8年に調査が行なわれた際、初痕のある土器が出土し、東北地方でも紀元前後頃には稲作農耕が営まれていたことを提倡した遺跡として全国的に著名である。古墳時代の遺跡としては、大代・樹形・砂山・薬師堂などの横穴古墳群があり、奈良・平安時代の遺跡としては、東原・西原・元舟場・新田前などの集落跡がある。

本遺跡は、大正8年に東北大学医学部の長谷部言人が調査を行なっており、始や牡蛎を中心とする数枚の貝層を確認している。遺物は縄文時代晩期の土器や骨角器などが出土しており土器の中には製塙土器もみられる。土地の削平工事中には、熟年男子の人骨も発見されている。しかし、その後、本格的な調査は行なわれず、遺跡の主要部は近年の土地開発行為等によって壊滅し、今日に至っている。

II 調査概要

調査は、貝層の東方への延び、及びそれに関連する遺構の検出を目的として行った。調査区は、開発対象区域内の四隅にトレンチを設定し、各トレンチにはNo.1～4の番号を付した。

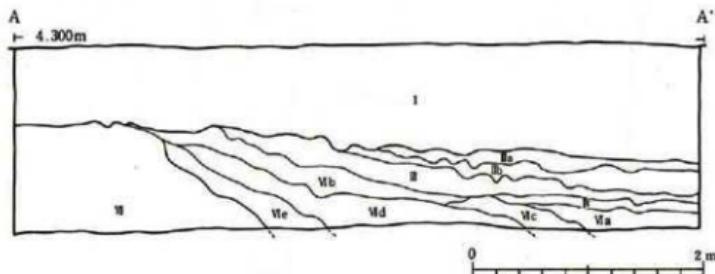
まず、部分的な坪掘りにより、調査区域には30cm～1m程の盛土がなされており、西側には旧道が残っていることが判明した。よって重機により盛土を除去したところ、No.1・4トレンチでは一面に砂の広がりを確認した。この面で遺構の検出作業を行ったが、数年前に建っていた家屋の基礎などの底みがみられるだけであった。

No.3トレンチでは、旧道のアスファルトを除去した後、No.1・4トレンチと同様に砂を検出した。そこでこの砂の堆積状況を知るために重機で約3m掘り下げたが、厚く砂が堆積しているのみであった。

No.2トレンチでは、黒褐色の砂質シルトおよび砂が堆積していた。この面での遺構の検出

作業を行うとともに、他のトレンチで確認されていた砂層（第Ⅵ層）との関係をつかむためにさらに南側へと拡張した。その結果、これらの土層は北側へむかって自然堆積の様相を示し、第Ⅶ層の上に堆積していることが判明した（第1図）。引き続き東側と西側にトレンチを分け、上層より掘り下げることにした。各東西トレンチでは、対応できる層（Ⅲ・Ⅳ層）がほぼ水平に堆積していた。さらに東側トレンチでは、V層が20~30cmの厚さでみられたが、西側トレンチでは確認されなかった。最下層のg層は第Ⅵ層がやや褐色化し汚れた感じの砂で、急な傾斜で堆積している。

以上のような堆積状況が把握されたが、水平堆積している土層の各上面では遺構は検出されず、また遺物等は皆無であった。



層位	土色	土性	その他の特徴	層位	土色	土性	その他の特徴	
I	盛 土				Via	にふい黄橙色 (10YR 4/6)	砂	黒色のシルトを含む。
IIa	褐灰 色 (10Y R 5/6)	シルト	やや粒性あり黄褐色のブロックを含む。	Vib	黄褐色 (2.5Y 4/6)	砂	均質。	
IIb	褐灰 色 (10Y R 5/6)	シルト	しまりなし。	Vic	黄褐色 (2.5Y 4/6)	砂	黒色のシルトを含む。	
III	灰白 色 (7.5Y R 5/6)	シルト	粒性が非常に細い。	Vid	にふい黄橙色 (2.5Y 4/6)	砂	白色のシルトを多量に含む。	
IV	褐灰 色 (7.5Y R 5/6)	砂質 シルト	粘性、しまりなし。	Vie	浅黄 色 (2.5Y 4/6)	砂	白色のシルトを含む。	
V	にふい黄橙色 (10Y R 4/6)	粘土質 シルト	砂を帯状に含む。	VII	浅黄 色 (2.5Y 4/6)	砂	均質。	

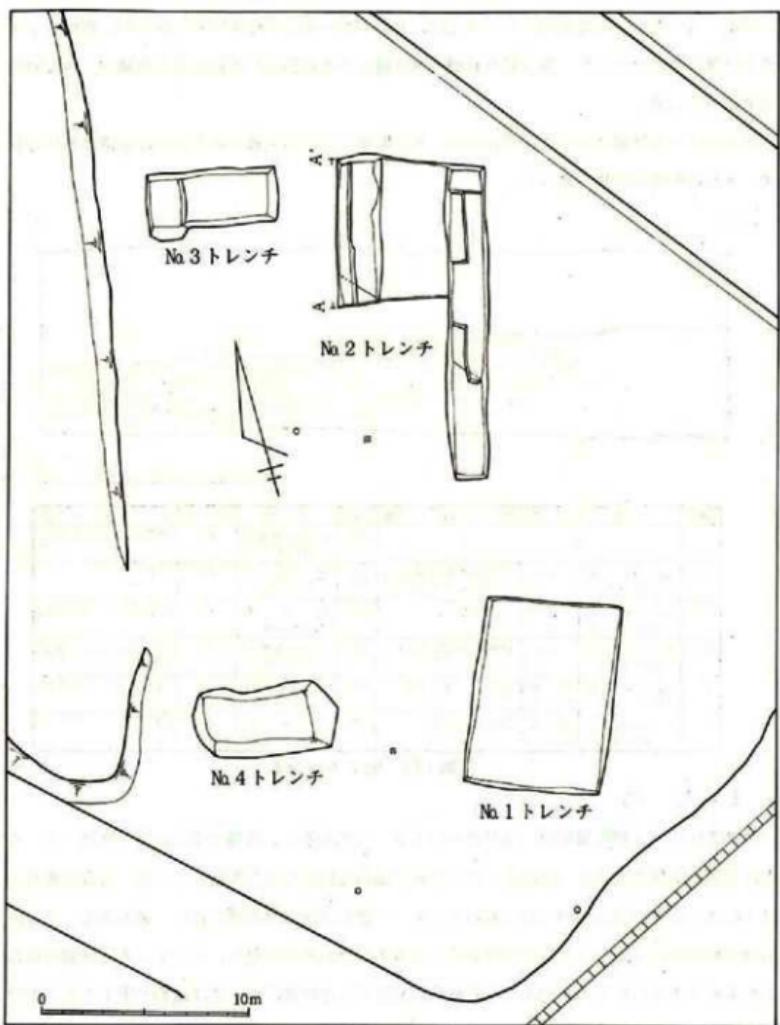
第1図 No. 2 トレンチ

III まとめ

本調査区内の土層堆積状況、地形についてまとめてみると、南側では砂が厚く堆積しているに対し、北側では異なった砂質シルトや砂が傾斜を持ちながら堆積していた。後者の堆積の仕方には、VI層の急な傾斜を持つものと、II~V層のほぼ水平堆積に近い二者がある。これはVI層の堆積が終了したところで侵食あるいは流失が行われ平坦化し、そして、水平堆積に移行したものと考えられる。このような低地形が形成された時期については遺物の出土もなく不明であるが、水平堆積の各層がもしテフラであるならば時期が明確になる可能性もある。

以上のことから、当該地は既に削平を受けており、丘陵の上部については原地形を保ってい

ないと判断される。また、遺構や遺物は全く発見されず、橋本圓貝塚の範囲は当地点までには及ばないことが判明した。



第2図 トレンチ配置図

(2) 留ヶ谷遺跡(第2次調査)

I 遺跡の立地と環境

留ヶ谷遺跡は、多賀城市の東部留ヶ谷一丁目(旧字名「中通り」)に所在する。留ヶ谷地区は、高崎丘陵と呼ばれる標高5~12mの小丘陵の北東端部に位置しており、本遺跡の所在する地点は大小の谷が入り組んだ複雑な地形を呈している。

高崎丘陵一帯には旧石器時代から江戸時代に及ぶ遺跡が多く分布している。本遺跡の南西1.3kmの丘陵南端部には約10万年前と推定される旧石器時代の志引遺跡、同じく南西0.9kmの地点には福井殿古墳、また西1.3kmの丘陵西端部には丸山団古墳群が点在している。奈良・平安時代の遺跡は分布密度が濃くなり、西0.8kmの地点には多賀城廃寺跡、そしてその周囲の丘陵上には集落跡と考えられる高崎遺跡が広く位置している。一方、本遺跡の北0.5kmの地点に近接する野田遺跡、小沢原遺跡もこの時期の集落跡と考えられている。また、中世以降の遺跡としては、館跡が多くみられる。ほとんどのものが丘陵の一角を利用したもので、本遺跡の南0.9kmの地点には桜井館跡、北0.5kmの地点には矢作ヶ館跡があり、安永3(1774)年の風土記御用書にその名が見える。また、志引遺跡やその西隣の東田中窪前遺跡も館跡と考えられている。発掘調査された例としては西0.9kmの地点に所在する多賀城跡作貢地区と館前遺跡がある。いずれも年代は限定できないが、作貢地区の館跡は、近世以降も塩釜神社の福宣志賀氏の屋敷として利用され、多くの陶磁器が出土している。

II 発掘調査の経緯

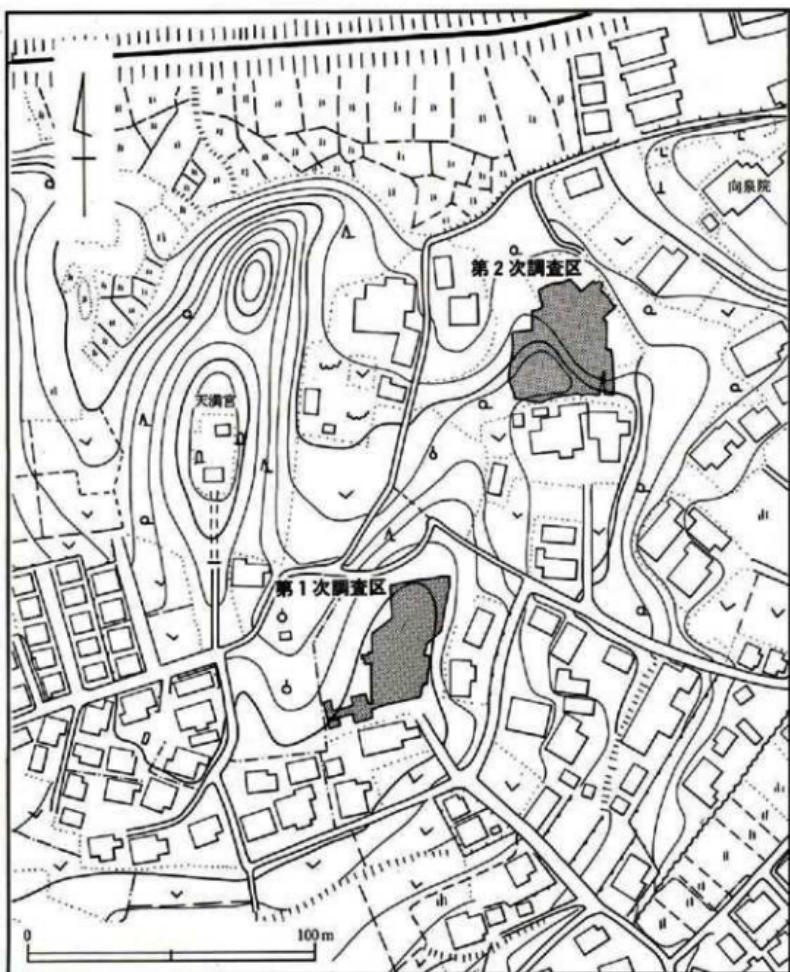
本遺跡の範囲は、およそ天満宮向泉院とに狭まれた高台一帯を想定しており、東西0.1km、南北0.1kmを計る。また、北・西・南の三方は谷によって囲まれているが、東のみ緩やかな傾斜面となっており、周辺の畠地には古代の土器片が散布している。

昭和59年7月丘陵部の開発行為が生じたため、周辺一帯の現地調査を実施したところ、土壘状の高まりや空掘状の落ち込みを発見し、同年11月試掘調査を実施した。その結果、館跡にみられる土壘とそれに伴なう空掘であることが判明し、館跡の一部ではないかと考えるに至った。本地点は従来高崎遺跡として大きくとらえていたが、館跡としての構築を有する地区を分離し、字名をとって新たに「留ヶ谷館跡」として登録したものである(註1)。

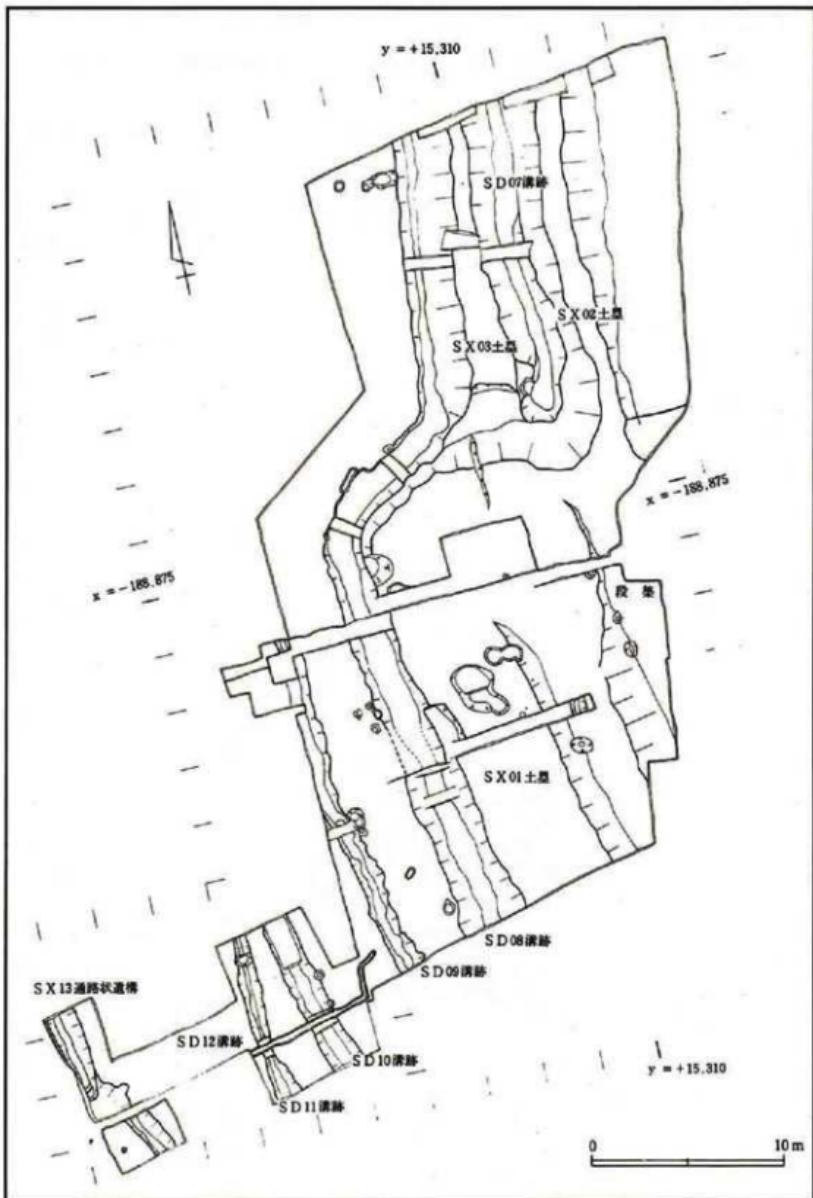
第1次調査区は本遺跡のはば南端に位置しており、土壘3条、溝跡8条、土塹3基の他斜面を段状に加工した段築構造などを発見した。この内、土壘と溝はセットで存在すると見られ同位置で2度の修築が行なわれているものも認められた。これらの構築年代は明らかではないが、最終段階の溝の埋土土層から寛永通宝や仙臺通宝(天明4年 1784 初鉄)が出土したことか

ら18世紀後半には埋没していたことが知られる。また、これらに先行する溝跡、壁が焼けた土塙なども発見している。遺物は古代の須恵器、土師器、灰釉陶器、中世・近世の陶磁器、古銭（寛永通宝・仙臺通宝）、砥石などが出土している。大部分は表土層から出土したものである。

今回の調査区は、本遺跡の北端にあたる旧鉢木芳藏氏宅地内のはば全域を対象に実施した。

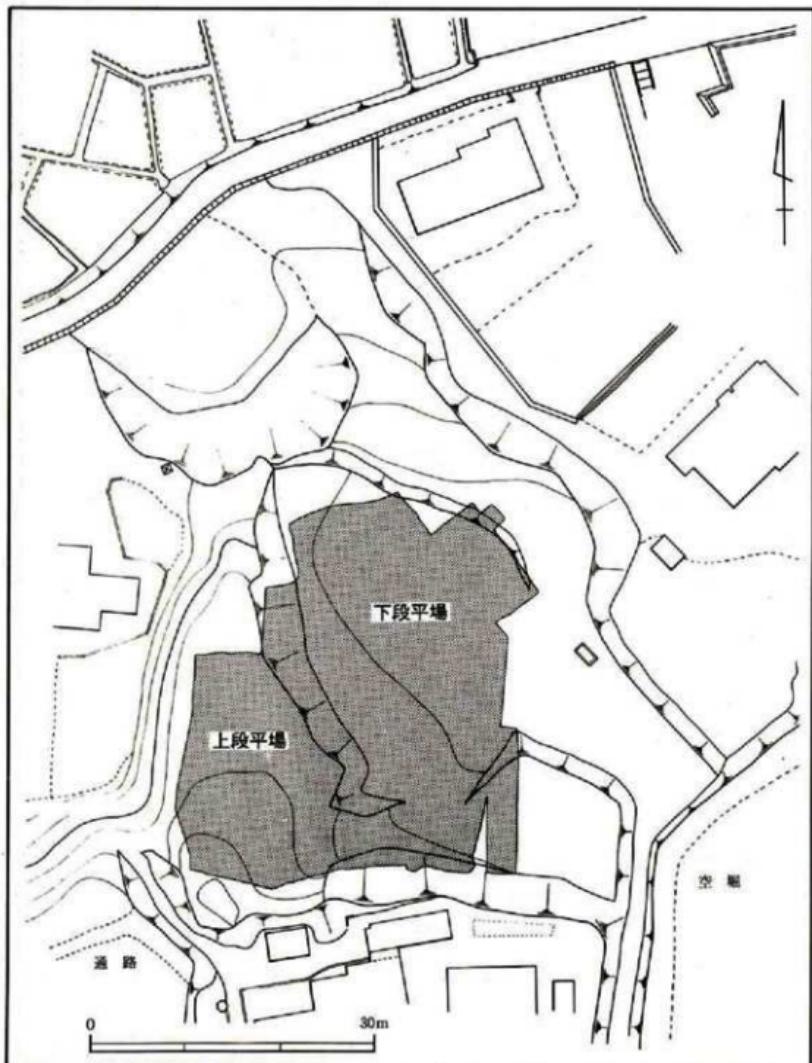


第1図 調査区位置図



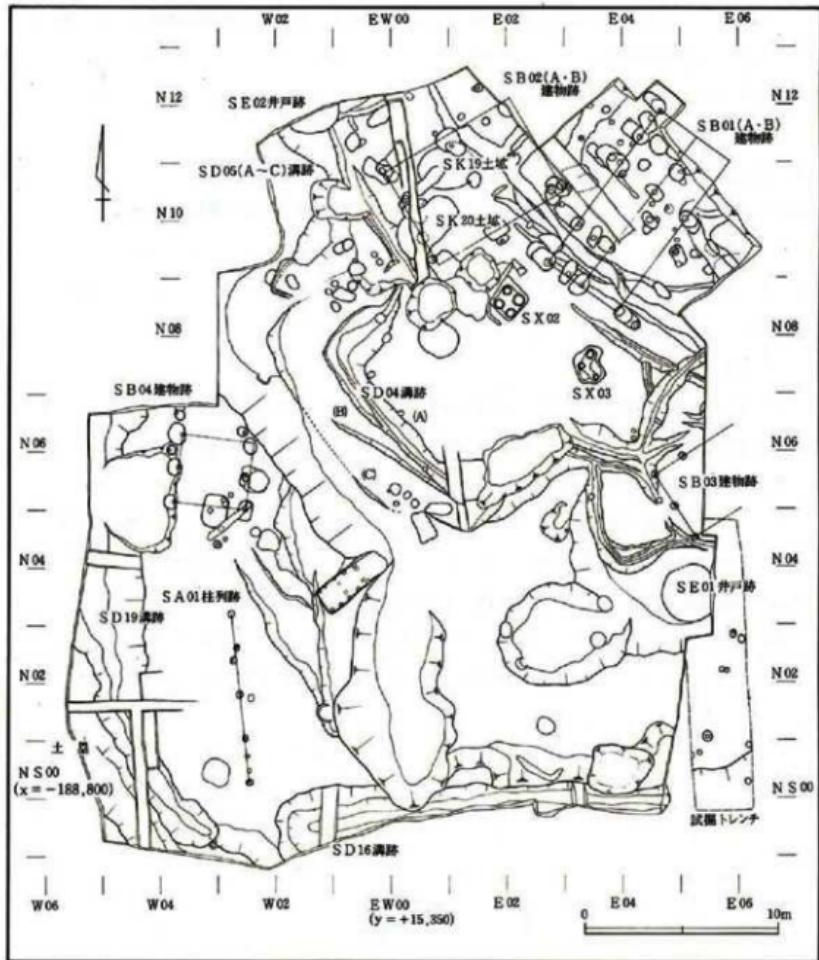
第2図 第1次調査構配図

本地区は南北に細長い二段の平場によって構成されており、南側は東西方向に土塁が走っている。北側にもかつて土塁状の高まりがあったことを確認しているが鉛木家解体の際に破壊されている。



第3図 調査区地形図

なお、本遺跡の東側に位置する向泉院は仙台藩の御用米運搬などのため御船入掘を切り開いた和田鐵部房長の側室の菩提寺であり、今回の調査区を含めた周辺一帯を和田氏及びその家臣の屋敷跡に比定する研究がある(註2)。



第4図 遺構配置図

III 発見遺構と遺物

1. 発見遺構

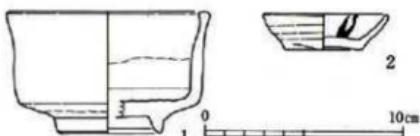
今回の調査区内、西半分の一段高い平場を仮りに上段平場、東半分を下段平場と称して、各平場ごとに発見した遺構について簡単に説明する。

(上段平場)

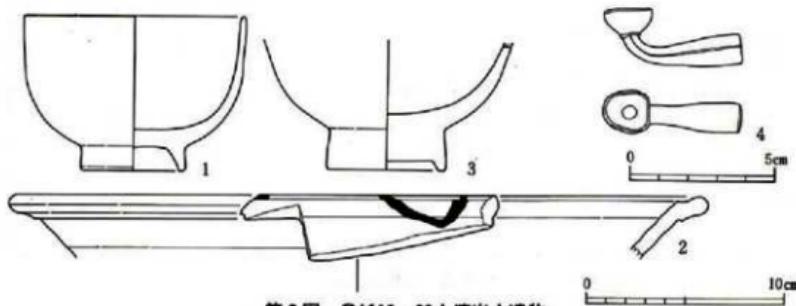
整地層をはさんで新旧2時期(A・B期)の遺構を発見した。A期の遺構としては南端に土塁(幅不明)とその北側に幅3m以上のS D 16溝跡がある。また、北端部には梁行1間・桁行2間の掘立柱建物跡があり、これらの間に南北方向に走るS A 01柱列跡を発見している。A期には東西約11mだったこの平場もB期には西側へ盛土し、幅約14mに拡幅している。また、土塁も西側へ大きく拡張している。この整地地業によってS D 16溝跡は埋められるが、新たに幅1.3~3.5mのS D 19溝跡が掘られている。本平場の表土中より多くの陶磁器が出土している。第5図の1は陶器火入れ、2はカワタケである。

(下段平場)

本平場は、上段平場の東側斜面をほぼ垂直に切り落として造成している。この平場では5度に及ぶ整地層を検出し、現代に至るまで連綿と生活を続けてきた状況を確認した(第1~5期)。第1期の様相は明らかでないが、北端部を中心に素掘りのS E 02井戸跡、S K 19・20土塙、南北に走る数条の溝を発見している。S K 20土塙より陶器碗、S K 19土塙より陶器鉢、漆器碗、煙管などが出土している(第6図)。1は縦付きを除き全面に灰釉を施した碗である。2は口縁部に銅錫釉を掛け流した灰釉の鉢である。美濃笠原地方の製品に類似が見られる(註3)。3は内面に朱漆、外面上に黒漆を施した碗である。底部が著しく肥厚しているものである。4は煙管の雁首である。火皿と首部の接合部には補強帯が巻かれ、全体に金箔が施されている。



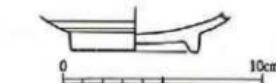
第5図 上段平場出土遺物



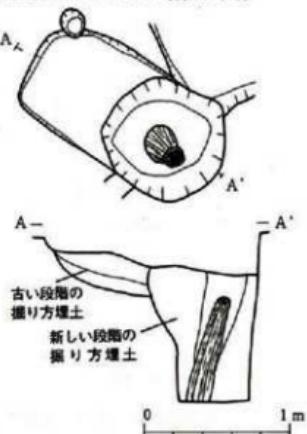
第6図 SK 19・20土塙出土遺物

第2期になるとS E 02井戸跡は埋め立てられ、全体に整地が行なわれる。渠行2間、桁行2間のS B 02掘立柱建物跡が建てられ、同位置で1度建て替えている。上段平場の裾部にはS D 05溝跡があり、ほぼ同位置で3度の重複がある。最も古い段階の埋土中より陶器碗(第7図)が出土している。底部付近の破片資料であるが内面にのみ灰釉が施されている。この時期に平場全体が屋敷として整備された様子がうかがえる。

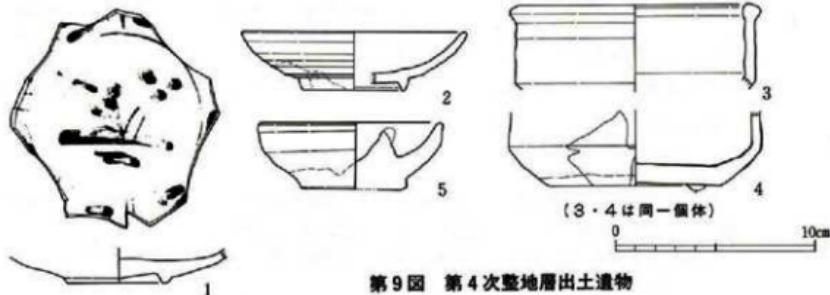
第3期には渠行2間、桁行4間のS B 01掘立柱建物跡がやはり東へ寄って建てられている。この建物も1度建て替えられているが、新しい柱穴は深さ約1.2mを計る大規模なものである。柱穴の中に面取りを行なった柱が残存していたものもある。南側柱列の西から1間目の柱穴は検出できなかった。第4期の遺構としては、S B 01建物跡のほぼ直上で埋桶遺構や一部石組にした配水路と見られる溝などを発見している。面の補修なども行なわれたようであるが全体に調査不十分で不明な部分が多い。この時期の遺構が構築されている第4次整地層より染付磁器皿、陶器皿、香炉、灯明皿などが出土している(第9図)。1は失透性の不安定な釉のかけられた皿で、内面には草花の文様が描かれている。2は疊付き及び外底を除き全面に灰釉を施した皿である。焼成時には直接重ね焼したものらしく、見込みにその痕跡が残っている。3・4は底部に小さな脚のつく香炉である。口縁部の釉は剥落し燐が付着している。5は見込みに舌状の灯芯受けを設けた灯明皿である。口縁部には著しく燐が付着している。



第7図 SD 05溝跡出土遺物



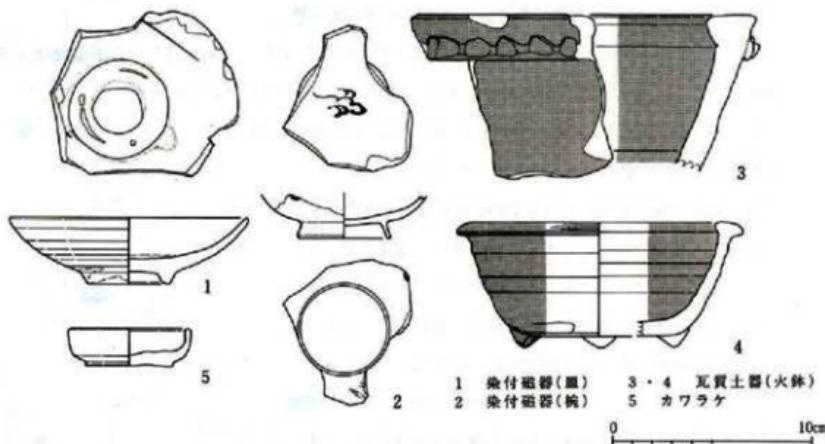
第8図 S B 01建物跡柱穴



第9図 第4次整地層出土遺物

これらすべてを覆うように最後の整地が行なわれ、その上に礎石立ちの旧鉛木家が建てられていた。遺構は平場中頃より北半部に多く集中している。しかし、南東隅に位置するS E 01井戸跡周辺では小さな柱穴で構成されるS B 03掘立柱建物跡をはじめいくつかの小柱穴を発見し

ているので、これらの東側にも遺構が広がっていた可能性が高い。



第10図 遺構外出土遺物

IV まとめ

1. 今回の調査で発見した主な遺構は、掘立柱建物跡4棟、柱列跡1条、井戸跡2基、土塁11基、溝跡22条である。また、これらの造成に伴なって下段平場では4回、上段平場では1回整地を行なっていることが判明した。
2. 遺構及び整地層から出土した遺物は、大部分が江戸時代のものである。SK 19・20土塁は、下段平場では最も古い遺構の一つであるが、出土した焼や鉢については17世紀中頃から18世紀初頭という年代が考えられ、第1次整地以後に造営された遺構の上限を示している。しかし、地山面で発見した他の遺構については、年代を限定できないものが多い。また、土塁や空堀についても構築年代を明らかにできなかった。
3. 今回の調査区の内、下段平場については江戸時代前半から現代に至るまで連続して営まれた屋敷跡と考えられる。

註1 第1・2次調査の成果を検討した結果、館跡としての遺構も見られるが、古代から近世に及ぶ複合遺跡として「留ヶ谷遺跡」とした方が適切であるとの結論に達し、改称した。

註2 寺崎修二「第十章 貞山運河、七北田川の付替、御舟曳堀、蒲生御蔵前、鶴巣御蔵、苦竹御蔵の歴史」『高砂の歴史』昭和59年9月

註3 笠原町教育委員会「笠原町の文化財」第1集 昭和49年3月

註4 灰釉の陶の年代については、名古屋大学の猪崎彰一先生に御教示頂き、鉢については前掲書及び「美濃の大鉢展」パンフレット（瑞浪陶磁資料館 昭和60年）を参考にした。また、岐阜市歴史博物館の伊藤嘉章氏からも御教示を頂いた。

(3) 柏木遺跡

I 遺跡の位置と環境

柏木遺跡は、多賀城市の中心部から約3km離れた大代5丁目に所在し、七ヶ浜町とはほぼ境を接している。本遺跡が立地している丘陵は、松島丘陵より派生してきた小起伏の低丘陵で、新第三紀に形成された砂岩及び凝灰質砂岩で形成されている。

本遺跡の周辺には、各時代の遺跡が多く所在しており、特に縄文時代のものとしては、国指定史跡である大木開貝塚、橋本開貝塚、左道貝塚、鬼ノ神山貝塚などがある。弥生時代のものでは、梯形圓貝塚、大代洞窟遺跡が知られている。また、本遺跡が立地している丘陵の斜面には、大代横穴古墳群や梯形圓横穴古墳群、砂山横穴古墳群、薬師堂横穴古墳群が造営されている。さらに本遺跡の南側に広がる沖積地には、東原・西原・元舟場・大代遺跡など奈良・平安時代に営まれた集落跡が所在している。

このように本遺跡の周辺の遺跡は早くから知られていたが、本遺跡については昭和54年の分布調査により土器片と鉄滓が若干採集されただけで、遺跡の性格や範囲については不明である。

II 調査報告

1. 分布調査報告

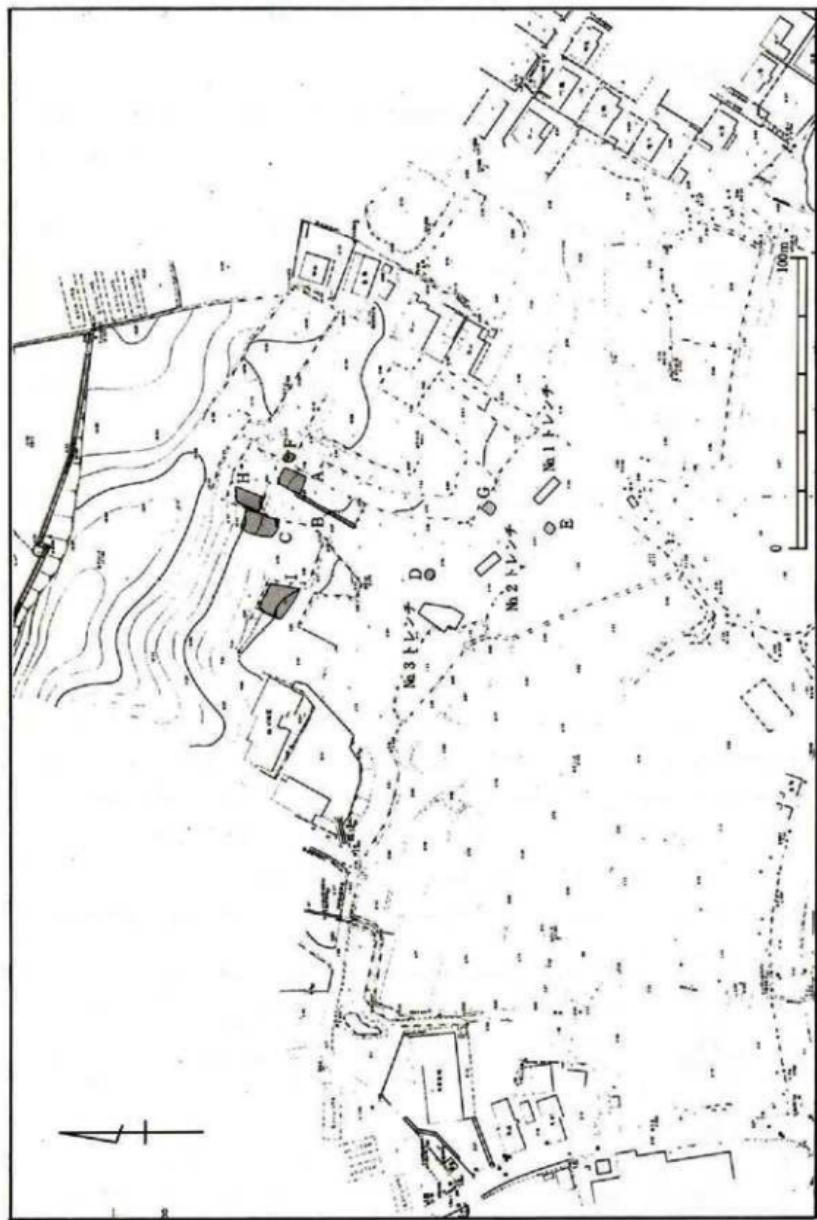
今回の分布調査においては図1に示すとおり、丘陵斜面部の10ヶ所の地点で遺物を採集することができた。遺物の内訳については、表1のとおりで土師器、須恵器、鉄滓がおもなものである。このうち注目される遺物としてはスサ入り粘土に鉄滓が付着したものであり、これは炉壁片の可能性がある。また、須恵器裏片に溶鉄滓が付着しているものもある。これらの遺物は製鉄に関係する遺構（炉跡、工房跡）から出土することが多く、本遺跡でも同様な遺構の存在が考えられる。A地点には黒灰色土（灰？）が全面にみられ、これも一つの裏付けとなろう。

このように、本遺跡の丘陵斜面部には製鉄に関係する遺構の存在が予想されたわけであるが、丘陵平坦部、あるいは沖積地にもこれに関連する遺構（住居跡、工房跡、灰原）、遺物が埋蔵されている可能性は高いといえよう。

地点	遺物名(数量)	備考(特徴など)
A	土師器(5点) 須恵器(2点)	クロ未使用の土師器(甕)1点、鉄滓の付着した土師器片1点
B	土師器(3点) 須恵器裏(3点) 鉄滓(11点)	
C	須恵器裏(2点) 須恵器裏(1点) 鉄滓(51点) スサ入り粘土(5点) 鉄製品(1点) 鉄滓の付着する壁(1点)	須恵器裏には鉄滓が付着しているものが1点ある。スサ入り粘土には鉄滓が付着している。
D	土師器(1点) 須恵器(1点)	
E	土師器(2点) 鉄滓(2点)	
F	スサ入り粘土(2点)	鉄滓が付着している。
G	鉄滓(3点) 骨片(2点)	
H	土師器(1点) 鉄滓(4点) スサ入り粘土(2点)	スサ入り粘土には鉄滓が付着している
I	鉄片(6点) 磁器(1点) スレート片(1点)	

表1 分布調査採集遺物

第1図 地形図



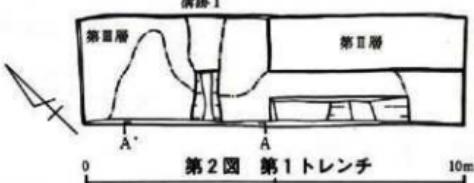
以上のことから、当該地域には埋蔵文化財の存在が考えられる。したがって試掘調査を実施し、遺跡の範囲やその性格について明らかにする必要がある。

2. 試掘調査報告

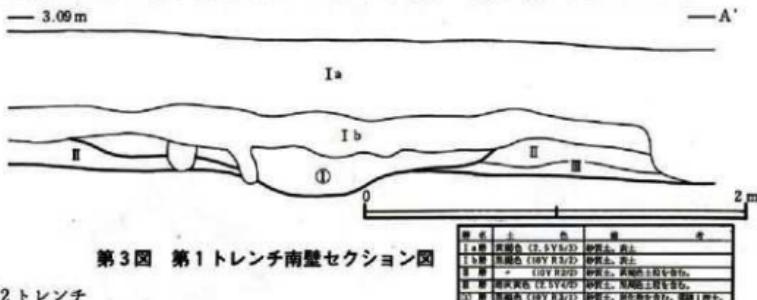
試掘調査は、丘陵裾部から南側の沖積地において遺構の有無を確認することを目的として実施した。この部分は現況では畠地及び水田となっている。分布調査の際には3地点で遺物が採集されているが、調査に際してはそれらの間をぬうように3本のトレンチを設定し、東側よりNo.1～No.3トレンチと呼称することとした。以下各トレンチごとに調査結果を説明する。

第1トレンチ

第II層上面で東西方向に走る溝
1条（溝跡1）を発見した。溝跡
1は上幅2.2m、下幅0.4m、深さ
0.3mの規模をもつものであり、



壁は両側とも緩やかに立ち上っている。埋土は黒褐色砂質土の單一層であり、炭火物や土器の細片・軽石などをわずかに含んでいる。この溝跡の埋土は近代以降の磁器を含む第I層と近似していることから、年代的には新しいものである可能性が強い。また、地山面で溝状の落ち込みを発見した。埋土は、地山の直上に堆積している第III層と同質の砂質土である。自然に形成された沢の一部かと考えられる。この落ち込みの埋土中から遺物は出土していないが、第III層より磨滅した土器の小片が数点出土している。うち1点には縄文が認められた。



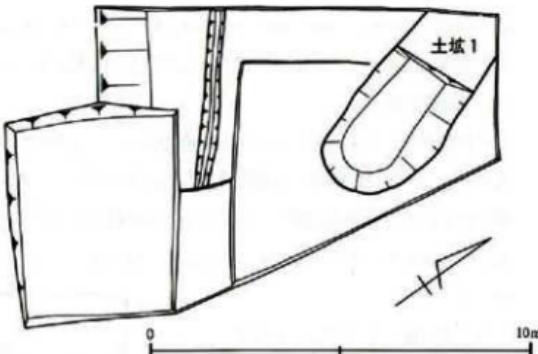
第2トレンチ

耕作土の下には近代以降の盛土が見られ、それより下は砂質土や砂の自然堆積層となっていた。遺構や遺物は発見できなかった。

第3トレンチ

本トレンチは旧水田にかかるており、床土の下は砂質土の地山面となっている。この地山面で土塙1基を発見した（土塙1）。これは短軸2.2～2.6m、長軸6m以上、深さ55cmの規模を持つものであり、溝跡の一部かとも考えられるが、一応長椭円形を呈する土塙と考えておきたい。

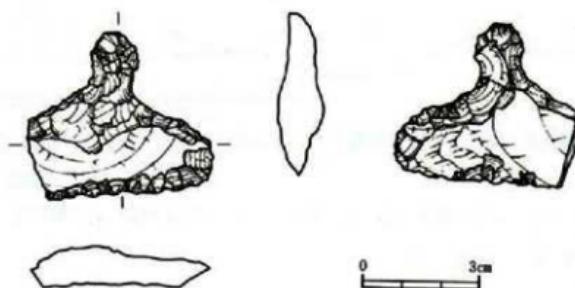
埋土中より、製鉄炉などに見られるような炉壁のブロックが1点出土している。1面には砂の混入した壁の一部がわずかに認められ、他の面には溶解物が厚くかかっている。



第4図 第3トレンチ

IIIまとめ

1. 今回の調査で発見した遺構は溝跡1条、土塙1基であり、遺物は縄文土器などの小片数点と炉壁(?)が出土している。
2. 土塙1の年代は不明であるが、溝跡1については近代以降のものである可能性が強い。
3. 5月に行なった分布調査では採集できなかつたが、今回試掘調査時に丘陵裾部で石匙を1点採集した(第5図)。石材は碧玉と考えられる。No.1トレンチでも地山直上の堆積層より縄文土器が出土したことより丘陵部には該期の遺構の存在が予想される。
4. 分布調査の結果、丘陵部に製鉄に関連する遺構の存在を予想しているが、裾部にまでは広がっていないと考えられる。



第5図 調査区隔接地採集遺物

(4) 新田遺跡(第5次調査)

I 遺跡の立地と環境

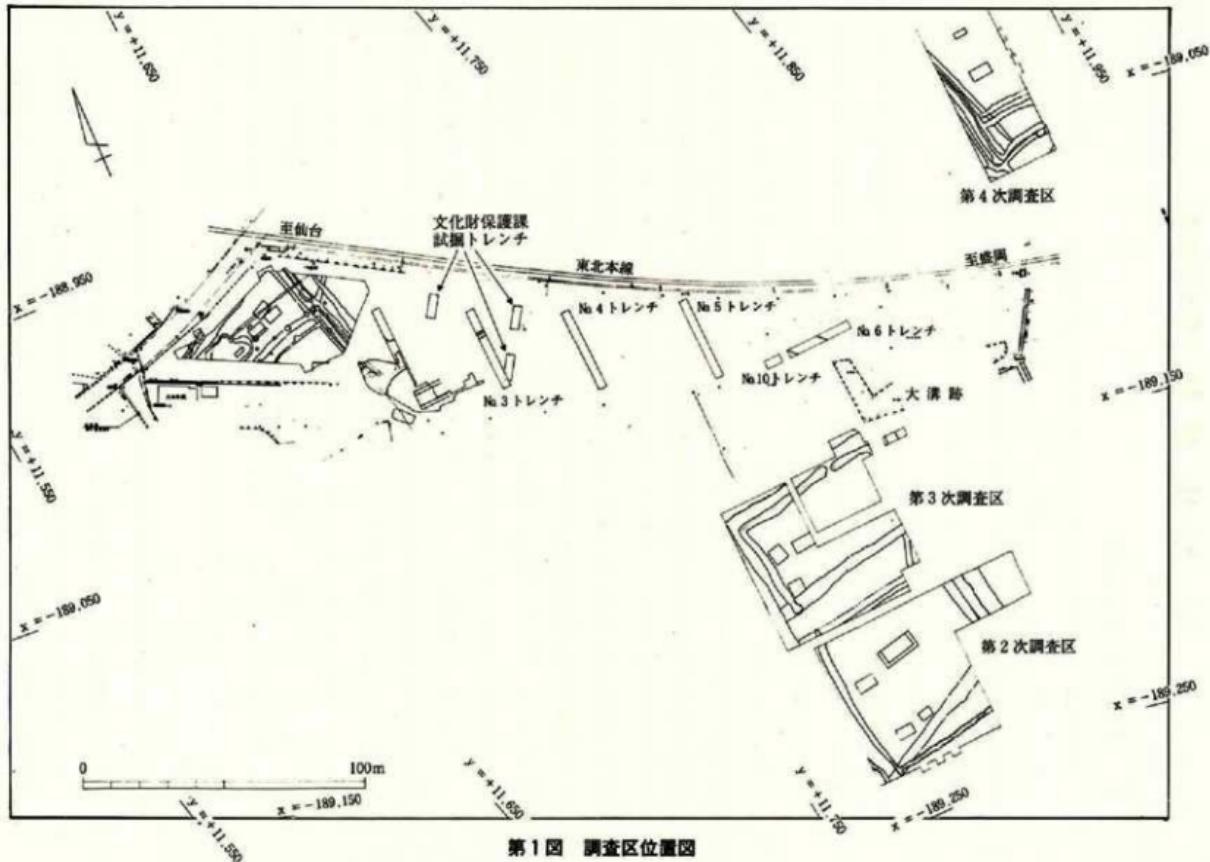
新田遺跡は、多賀城市の中心部から西へ約3.5km離れた地点に所在している。北は県道根白石～塩釜線、西は七北田川によって限られ、東西・南北に「く」の字形に展開している。本遺跡は北寿福寺・南寿福寺・後・西後・六歳・北安楽寺・南安楽寺・西などの集落を包括し、その範囲は南北1.6km、東西0.8kmと約1.3kmに及んでいる。この内、今回調査を実施したのは北寿福寺地区の南端に位置する休憩地である。

本遺跡周辺、即ち多賀城市的西部から仙台市の東部にかけては多くの遺跡が知られている。現在のところ、弥生時代に遡るものは確認されていないが、本遺跡と山王遺跡、及び七北田川をはさんで東西に連なる鴻ノ巣遺跡(仙台市)はいずれも古墳時代から中世にかけての複合遺跡である。古墳時代についてみると、中期に属するものが多く、後期に属するものは少ない。住居跡の発見はあまり多くはないが、山王遺跡や本遺跡では遺物を多量に包蔵する土坑が多く発見されている。奈良・平安時代になると遺構の分布は密度を増し、堅穴住居跡や掘立柱建物跡が各地で発見されている。本遺跡においても石帶や銀環などが発見されており、特殊な階層の存在を想定させる。中世以降の遺跡も各所に分布している。この内、遺構の存在が最も明瞭なものは館跡である。現在多賀城市内には12ヶ所、隣接する仙台市岩切周辺でも7ヶ所の館跡が知られている。それらの大部分は丘陵地に立地しており、本遺跡より西方約1kmの地点に所在する岩切城は、当地域においては屈指の規模を誇る山城である。一方、沖積地に立地するものとしては内館、山地田館などがある。また、本遺跡内の安楽寺や仙台市岩切の洞の口には、細長い水田で囲まれた微高地が存在し館跡の存在が指摘されている(註1)。信仰関係の資料も多く、岩切を中心とした地域は県内でも板碑が数多く集中する地域の一つとして知られている。

また、本遺跡を含めた七北田川流域から利府町にかけての地域は、中世には留守氏の所領であったとされており、觀応2(1351)年の吉良貞家軍勢催促状などに見える新田城を本遺跡の中の安楽寺付近に比定する考え方や(註2)、留守家文書にしばしば見出せる荒野七町歩の開墾の舞台を本遺跡の北部から利府町にかけて広がる水田地帯に求める考え方(註3)などが文献史学の側から示されている。

このように本遺跡の周辺には古墳時代から中世に至る多くの遺跡があり、時代による消長はあるものの比較的安定した生活基盤であったと推定される。

なお、本遺跡については、昭和49年8月に県文化財保護課が試掘調査を行ない中世の溝跡、平安時代の埋甕などを発見している(註4)。次いで昭和56年度以降は多賀城市教育委員会が一貫して調査を実施しており、多くの成果を挙げているがそれについては本書第1章に概要を記



第1図 調査区位置図

してあるので参照されたい。

II. 調査方法

今回の調査区は、第2・3次調査区と第4次調査区との間に位置し、いずれの調査でも多くの遺構・遺物を発見しているところから、当然本調査区においても同様の成果が期待されていた。そこで、本格的な調査に先立って試掘調査を行ない、遺構の分布状況及び保存状況を把握した上で調査区の設定を行なうこととした。

試掘はトレンチNo.1～10を調査区全域に亘って設定し、中世の遺物を包含する黒色土上面まで掘り下げた。その結果、No.4・8トレンチを除くすべてのトレンチで黒色土が現われ、柱穴や溝跡、井戸跡と思われる円形の土壙などを発見した。一番東側のNo.6トレンチでは、幅約8mの大溝跡を発見している。また、黒色土層は掘り下げなかつたが、第2～4次調査の成果や、一部深く掘削した箇所では埋土中に灰白色火山灰が堆積した溝跡を発見しており、黒色土層下においても遺構の存在はほぼ確実と判断した。

この試掘の成果をもとに、西側より調査を開始したが日程の都合で本年度は全体の2割(2,000m²)についてのみ調査を行ない、他については次年度に行なうこととした。

III 発見遺構と遺物

今回の調査で発見した主な遺構には掘立柱建物跡8棟、柱列跡3条、土壙28基、溝跡30条、土壙墓1基、埋桶遺構2基などがある。また、建物跡や柱列跡としてまとまらない小柱穴や幅20cm前後の小さな溝跡も多数発見している。これらの遺構は、4枚の遺構面でそれぞれ検出したものであるが、最終遺構面である地山上で発見した遺構の中には、後世の削平により、上層遺構面との関係が把握できなかったものも含まれている。以下、発見した遺構と遺物について簡単に説明する。

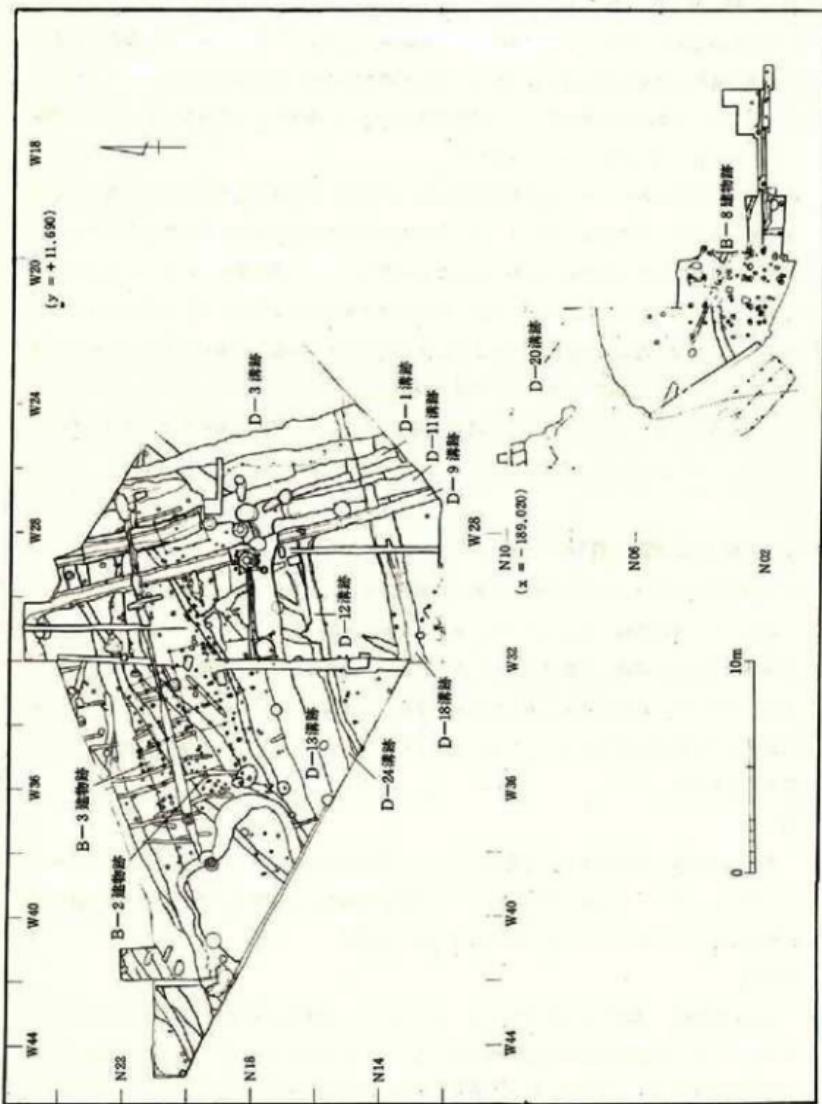
第1面

溝跡、土壙墓、埋桶遺構などを発見している。土壙墓からは、骨片、焼土とともに北宋錢が2点出土しており、六道錢と考えられる。この面の遺構の年代は限定し難いが、近世以降の陶磁器が出土していることから江戸時代以降と考えられる。

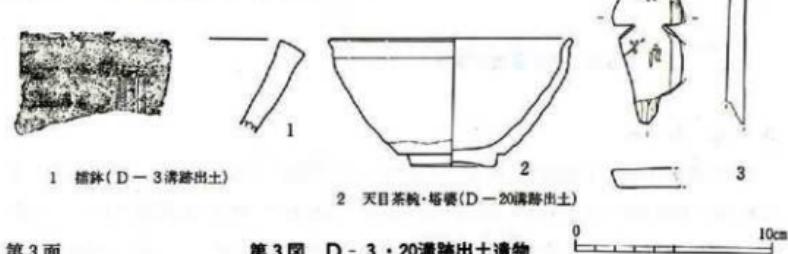
第2面

掘立柱建物跡、溝跡、土壙などを発見している。D-20溝跡は東西方向に走る最大幅約10mの大溝である。調査区西端では直角に折れ曲がり、南へのびている。この溝の北西隅にD-3溝跡が合流するようである。D-3溝跡の東側では全く遺構が発見できなかつたのに対し、西側では掘立柱建物跡、柱列跡、素掘りの井戸と考えられる円形の土壙など多くの遺構を発見

第2図 遺構配置図



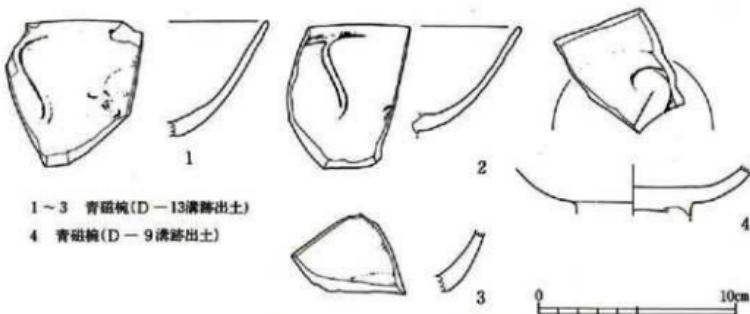
からは近世以降の陶磁器が出土しており、長い間開口した状態であったことが推察される。また、本溝跡からは多くの木製品が出土しており、鉢・板草履芯板・桶側板・曲物底板・漆器椀・塔婆・杭・木製錘・木槌・栓など多くの種類が見られる。



第3面

第3図 D-3・20溝跡出土遺物

掘立柱建物跡、柱列跡、溝跡、土塀などを発見している。D-1・9・11溝跡は、やや東西方向にずれながらも、大体同位置同方向で作り替えられた南北溝である。いずれも東西方向に走る溝(D-13溝跡など)が合流するなど同じパターンを踏襲している。掘立柱建物跡や素掘りの井戸と考えられる円形の土塀などはD-13溝跡の北側で発見している。溝跡からは中国産の青磁碗が数点出土している。いずれも破片資料であるが、内面にのみ片切彫りの文様を彫り込んだタイプの碗である。これらの碗より、この時期の年代は鎌倉時代前半と考えておきたい(註2)。



第4面

第4図 D-9・13溝跡出土遺物

溝跡、土塀などを発見している。溝跡は、出土遺物が少なく、時期を限定できないが、灰白色火山灰降下時には既に埋没しているものとしてD-18・24溝跡がある。これらはほぼ平行して走り、両者の間には遺構が存在しないことから、道路状遺構と考えられるが明らかでない。土塀はわずかに1基発見しているが、灰白色火山灰降下後の遺構であり、埋土中より赤焼き土



第5図 表土層出土遺物

IV まとめ

今回の調査で発見した遺構は、検出した面によって4時期に区分することができる。第1期（第4面）は10世紀前半を前後する時期の遺構と見えられるが、発見した遺構のほとんどが溝跡であり、この時期の具体的な様相は判然としない。第II・III期（第2・3面）の遺構群は、溝跡と建物・井戸跡の分布にまとまりがあり、両者間の関連性をうかがうことができる。南北溝と東西溝が方形の区画の東辺と北辺を成しその内側に建物や井戸を配したものと見られる。同様の遺構は、隣接する第2～4次調査区においても発見しており、周辺一帯に存在した可能性が高い。このような遺構の性格は、現段階では武士階級の「館（やかた）」と考えているが、今後の調査を通して検討して行きたい。

文化財担当職員体制(昭和54年度～61年度)

(昭和54年度)

社会教育課長 阿部祐悟
 " 係長 熊谷貞男
 社会教育主事 杉田裕孝
 主 事 高倉敏明
 (54. 4. 1採用)

(昭和55年度)

社会教育課長 阿部祐悟
 " 係長 熊谷貞男
 主 事 高倉敏明
 " 滝口卓
 痞 託 白石直子

(昭和56年度～57年度)

社会教育課長 戸村陸男
 文化財保護係長 菊地光信
 技 師 高倉敏明
 " 滝口卓
 痞 託 石本敬
 (57. 4. 1採用)

(昭和58年度)

社会教育課長 柳原邦男
 文化財保護係長 菊地光信
 技 師 高倉敏明
 " 滝口卓
 痞 託 石本敬
 " 千葉孝弥
 " 相沢清利
 (58. 9. 20採用)
 (58. 9. 20採用)

(昭和59年度)

社会教育課長 柳原邦男
 文化財保護係長 菊地光信
 主 師 査 高倉敏明
 技 師 滝口卓
 " 石川俊英
 (59. 4. 1採用)

(昭和60年度)

社会教育課長 柳原邦男
 文化財保護係長 高倉敏明
 技 師 滝口卓
 主 事 柏原靖史
 痞 託 千葉孝弥
 " 相沢清利
 (60. 4. 1採用)

(昭和61年度)

社会教育課長 柳原邦男
 文化財保護係長 高倉敏明
 技 師 滝口卓
 " 石川俊英
 " 千葉孝弥
 " 相沢清利
 主 事 柏原靖史

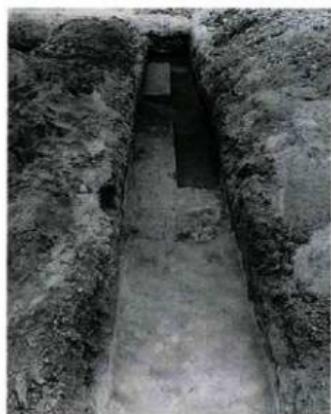
文化財調査報告書刊行目録

第1集	館前遺跡 一 昭和54年度発掘調査報告書 一	(昭和55年3月)
第2集	山王・高崎遺跡発掘調査概報	(昭和56年3月)
第3集	高崎・市川橋遺跡調査報告書 一 昭和56年度発掘調査報告書 一	(昭和57年3月)
第4集	市川橋遺跡調査報告書 一 昭和57年度発掘調査報告書 一	(昭和58年3月)
第5集	市川橋遺跡調査報告書 一 昭和58年度発掘調査報告書 一	(昭和59年3月)
第6集	志引遺跡 一 志引遺跡発掘調査報告書 一	(昭和59年3月)
第7集	大代横穴古墳群 一 発掘調査報告書 一	(昭和60年3月)
第8集	市川橋遺跡 一 昭和59年度発掘調査報告書 一	(昭和60年3月)
第9集	山王遺跡 一 昭和60年度発掘調査報告書 I 一	(昭和61年3月)
第10集	山王遺跡 一 昭和60年度発掘調査報告書 II 一	(昭和61年3月)
第11集	高崎遺跡 一 都市計画道路高崎大代線外1線 建設工事関連発掘調査報告書 I 一	(昭和61年3月)
第12集	高崎遺跡 一 都市計画道路高崎大代線外1線 建設工事関連発掘調査報告書 II 一	(昭和62年3月)
第13集	市川橋遺跡 一 昭和61年度発掘調査報告書 一	(昭和62年3月)

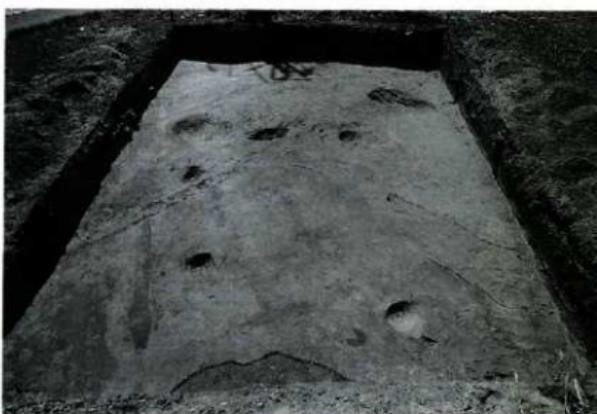
橋本貝塚



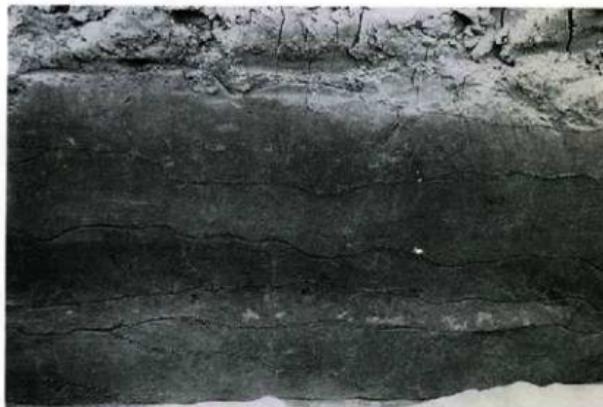
図版1 調査区全景(南より)



図版2 No.2 東トレンチ(南より)



図版3 No.1 トレンチ(北より)。



図版4 No.2 東トレンチ土層堆積状況

留ヶ谷遺跡



図版1
調査区遠景(北より)



図版2
上段平場の遺構(北より)



図版3
SD16溝跡(東より)

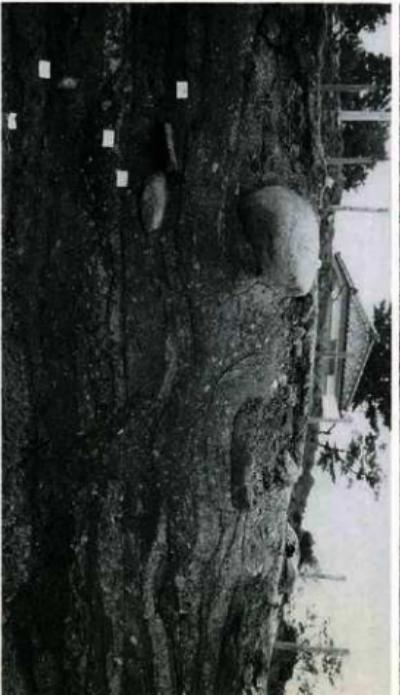
図版4
下段平場の遺構
(西より)



図版5
SB01柱穴



図版6
下段平場の整地面

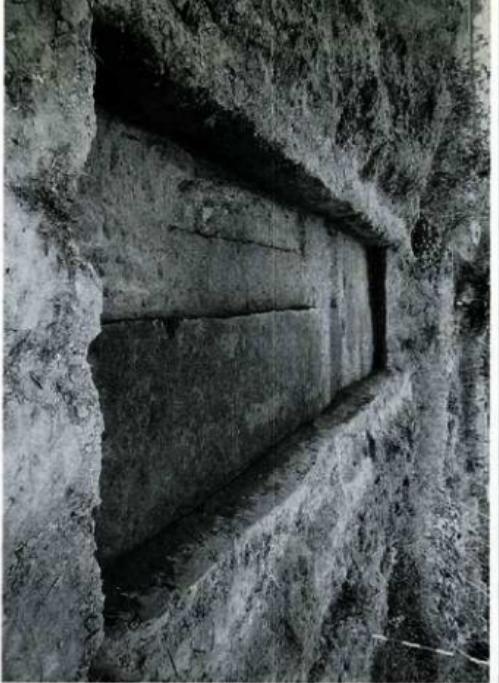


図版7
陶器検出土状況
(SK20土壠)



柏木遺跡

図版1
調査区遠景(南より)
No.1 トレンチ(東より)



図版2
No.1 トレンチ(東より)



図版3
No.3 トレンチ(南より)

新田遺跡

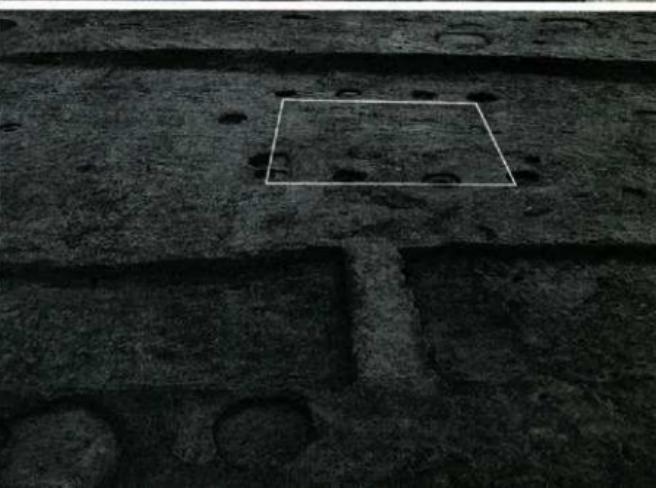
図版1
遺構検出状況
(西より)



図版2
D-1・9・13・3溝跡
(南より)



図版3
B-3建物跡
(北より)





図版4
第4面の遺構(西より)



図版5
第4面の遺構
(南東より)



図版6
D-18・24溝跡
(第4面の遺構)

多賀城市文化財調査報告書第14集

年 報 1

昭和62年3月31日 発行

編集 多賀城市教育委員会
発行 多賀城市中央二丁目1番1号
電話(022)368-1141

印刷 藤 印 刷
多賀城市大代一丁目6番9号
電話(022)367-0157
